

2016 年 1 月 14 日（土）
高岡市生涯学習センター503 研修室
14:00～15:30

「とやまの漁撈用具と和船」

氷見市立博物館主任学芸員
廣瀬 直樹 氏

1. とやまの漁撈とその歴史

平成 27 年 3 月 2 日に氷見市立博物館所蔵の漁撈用具 2853 点が、「氷見及び周辺地域の漁撈用具」として国の登録有形民俗文化財になった。登録された漁撈用具は氷見市内のものが中心だが、他にも氷見市以外の富山県内のものが 381 点、七尾市、羽咋市、志賀町、一部輪島も含めた能登地域のものが 47 点あり、これらは博物館および氷見市文化財センターで収蔵・展示している。



漁撈用具には、漁業に使われる網や釣り針ばかりでなく、捕った魚を加工する道具、船に関する道具、漁師の信仰儀礼に関する道具、漁師が着る仕事着、船の上で使う水樽などの生活用具、船を造る船大工用具および大工用具なども含まれる。

氷見沖では、昭和 40 年代まで木造の船で定置網のブリが水揚げされていた。富山湾では定置網の他、釣り漁といわれる一本釣りや延縄漁、刺し網漁、地曳網をはじめとする曳網漁などが行われている。そのうち中心となるのは定置網漁で、垣網という網を海中に張り巡らせ、それに沿って回遊してくる魚の群れを身網という網の中に誘導して船に水揚げする漁法である。現在でも氷見のブリ、滑川のホタルイカ漁をはじめ、季節を問わず行われている。

現在の定置網は、垣網と運動場とも呼ばれる魚が回遊する角斗網、のぼり網を持つ身網からなるが、江戸時代に氷見沖に仕掛けられていた定置網は「コ」の字形の身網を持つ定置網が連なっているものであった。現在の定置網の写真を見ても、大きな定置網が二つつながって沖の方に延びているのがわかるが、江戸時代も沖の方に仕掛けられたところからどんどん継ぎ足して延びていた。



現在の定置網（平成 9 年頃、氷見市灘浦沖「島の大敷」）

定置網漁には 400 年以上の歴史がある。富山湾の記録に残っている一番古いものは、慶長 19 年（1614 年）、氷見の灘浦宇波村の沢二番の夏網である。富山湾では季節によって捕る魚が違う。夏網は夏にマグロを捕るための網である。二番があるということは、当然一番があるし、夏網というからには他の季節の網もあった可能性がある。従って、さらにそれをさかのぼる歴史があると考えられる。また、それをさらにさかのぼり得る記録が能登灘浦から能登内浦にあるので、広い意味での富山湾では、室町時代末期には定置網漁が行われていたのではないかと考えられている。

他の資料からは、元和 4 年（1618 年）に同じく宇波村の沢二番の鰯網が許可されていることが明らかになっている。この年に二番の鰯網が許可されたということは、当然、その前に一番の網が掛けられていたことになる。元和 7 年（1621 年）には宇波から南の、氷見の阿尾村の樽水二番の鰯網も許可されている。もう少し時代が下り、延宝 6 年（1678 年）ごろには氷見町で春網（鰯網）の操業が行われている。

また、定置網漁とは具体的に書いていないが、冬場に氷見で捕れたブリを前田利家が京都に送ったという記録も残っている。文禄 4 年（1595 年）というから、関ヶ原の合戦の 5 年前にあたる年の旧暦 11 月 7 日（現在の 12 月半ば）、当時、京都に住まいしていた加賀藩の藩祖である前田利家が、金沢にいる老臣たちを介して氷見の宇波村に書状を送り、ブリ 17 本を「よく塩をさせ、背刀を入れ、いかにもいかにも念を入れ」て、至急、京都にまで送り届けるよう書いているのである。これが、氷見とブリの関係が分かる最古の資料である。同時に、これは昭和 30 年代まで盛んに作られていた塩ブリに関する最古の資料でもある。現在も魚津や滑川では塩ブリを作っているが、今では値段が非常に高い。昭和 30 年代ぐらいまで作られていた塩ブリは、基本的に保存用であり、飛騨や信州など、魚の捕れない内陸の地域に運ばれた。当地では「年取り魚」として、正月を迎えた年越しの際に食べられた。

根拠の無い話だが、前田利家が京都に送らせたブリを食べたのは豊臣秀吉ではなかったかと考えている。当時、京都では伏見城が完成を迎えつつあり、豊臣秀吉と生まれたばかりの秀頼親子が住まいしていた。だいぶ気を張った書状の内容からして、氷見からブリを取り寄せたのは前田利家が主である秀吉に贈るためだったのではないかと。また、この書状からもう一つ言えるのは、氷見に頼めば、冬場の荒れた日本海でもまとまった数の、しかも質の良いブリが確実に手に入るということ、金沢にいた前田利家の家臣たちはよく知っていたということである。さらに言えば、冬場の日本海でブリを水揚げするとすれば、それは定置網漁だった可能性が高い。

2. 定置網漁の歴史

「定置網」という言葉は、明治時代に漁業法が制定されたときに使われるようになった言葉であり、富山湾の定置網は江戸時代には「台網」（だいまみ）と呼ばれていた。台網は、「台」と呼ばれる丸太を束ねた大きな浮子（うき）に、ぶら下がるような状態で魚を水揚げする袋状の身網と、魚群を導く垣網が付いていた。現在、網は化学繊維、浮子は鉄や樹脂製だが、江戸時代は当然ながら天然素材で、台はスギの丸太や竹をくりつけて束ねたもの、身網に使われるのは藁縄を織機で織った網で、垣網は藁縄を編んだ網、錘りには稲藁で編んだ俵の中に砂利を詰め込んだ石俵が使われていた。また、浮子には竹のほかにもス

ギヤキリが使われていた。

藁縄はそもそも長持ちしないこともあり、氷見では季節ごとに網を作り換えていた。春にはイワシやイカを捕る春網(鰯網)、夏には回遊してくる大きなクロマグロを捕る夏網(鮪網)、秋にはブリなどを捕る秋網(鰯網)が仕掛けられていた。昭和 40 年代以降、長期間の使用に耐える化学繊維の網が導入され、現在では年間を通じて敷設されている。江戸時代の定置網漁の姿を書き留めているのが、天明 5 年(1785 年)の『越中魚津漁業図絵』である。魚津の鰯網では、錘りに小さな砂利を詰めた石俵ではなく大きな石が使われている。大きな河川がない氷見とは違い、河原から大きな石が手に入りやすかったからだろう。

その後、幕末の文久元年(1861 年)に「麻苧(あさお)台網」と呼ばれる麻の繊維を使った網が導入され、沿岸に仕掛けられる小型の定置網に用いられるようになった。明治 40 年になると、宮崎県の「日高式大敷網」が氷見でも導入され、定置網の大規模化、集約化が図られる。垣網は従来どおり藁網だったが、身網には麻糸網や綿糸網を使うようになった。この新型の定置網は大量の水揚げがあったといい、氷見の網元たちはその日高式大敷網に改良を重ね、明治の終わりごろには「上野式台謀網」が出来上がった。それにより、さらに水揚げが増えた。そして、大正の終わりから昭和の初めになると、「越中式鰯落とし網」という、落とし網構造という魚が逃げづらい仕組みの定置網が生み出された。現在はこの落とし網が二重、三重に仕掛けられた定置網が用いられている。このような工夫が、明治時代の終わりから昭和の初めころにかけて順次行われていき、それに伴って網の大規模化が図られていった。

定置網は、回遊してくる魚の群れのせいぜい 2~3 割を捕るだけだといわれている。だからこそ、江戸時代から続いてきたのだろう。特に冬場はブリが北から南に産卵をしに移動する途中であり、富山湾でそれを一網打尽にすると次の年には回遊してこないことになる。

天明 5 年(1785 年)『越中魚津漁業図絵』は、江戸時代の漁法を描いた、漁業の歴史を知る上で全国的にも非常に面白い資料で、石川県立図書館ホームページ「貴重資料ギャラリー」内の「森田文庫」で閲覧することができる。網の大きさ、どんな船が用いられたか、それが何人乗りで操業されたかといったことが書いてある。台網としては、冬場の「鰯台網」のほかに「夏台網」が掲載されている。氷見では夏場の台網はマグロを捕る網であったが、魚津の「夏台網」はタイを捕る網だった。冬場の「鰯台網」と比べると一回りほど小型である。

氷見にも、江戸時代の終わりから明治時代初め頃にかけて描かれたと考えられる、氷見浦の鰯網を海中から見た図面が残る。魚津のものとは違い、既に 3 艘の船で網取りを始めたところを描写している。魚が入ると漁師が網を引き上げて網の口を閉じ、身網の中に魚を閉じ込める。そして、奥の台の辺りで水揚げをする。昔と今の定置網の一番大きな違いは、落とし網構造かどうかである。今は明け方、漁師が定置網まで行き、魚を水揚げして帰ってくる。しかし、台網の時代は、魚が入ってもすぐに出てしまうので、漁期には漁師は船で寝泊まりし、魚が入ると一斉に網取りをした。

3. 藁網の循環

江戸時代に使われていたのと同じ藁網の一部が、氷見市立博物館に現存している。3 カ月程度の漁期が終われば海中で朽ち果ててしまうものなので、恐らく未使用品が倉庫など

に残っていたのであろう。身網も垣網も藁縄を使用している。登録された漁撈用具 2853 点の中でも一番目玉になる資料である。垣網は通常の漁網と同じく網棒を使って編まれている、身網は縦・横に藁縄を織って作られている。



「氷見及び周辺地域の漁撈用具」より定置網関係用具

藁網は、海中で大きな循環を生み出していた。春網、夏網、秋網は、それぞれ漁期が終わると浮子から切り離されて海中に沈む。ゆっくり腐っていくところにプランクトンが寄り付き、それを食べに小さな魚が寄り付く。そして、小さな魚を食べに大きな魚がやってくる。つまり、藁網は海底で漁礁の役割を果たす。最後は完全に分解されて何も残らない。

同時に藁網は、農村と漁村をつなぐ循環も生んでいた。藁網の材料である稲藁は、米作りの副産物として農村で生産される。農家が冬場の仕事として縄をない、それが漁師の手元に渡り、藁網に仕立てられて漁網になる。それを使って捕られた魚は、農家で食べられるのはもちろんのことだが、特に江戸時代から明治、大正時代にかけてはたくさん獲れたイワシが田んぼの肥料として活用された。

一方、山村からは、柿渋が漁村に供給された。山村で取れた渋柿を細い穴の開いた柿渋桶に入れ、杵でつぶして作った柿渋は、綿糸網など漁網の腐食防止に使われていた。また、イワシを煮て樽に入れ、杵粕樽で油分を搾って押し固めた杵粕は、大正時代ごろから魚肥とし農村で使われた。こうした柿渋を絞る桶と杵粕樽は、登録有形民俗文化財になった漁

撈用具に含まれている。

このように、漁村は農村や山村とも非常に深くつながっていた。化学繊維の網になってそういうつながりは若干切れてはいるが、魚群を根こそぎ捕らないという利点を持つ定置網漁は現在も続いている。

4. 漁撈用具の変遷と船

江戸時代の初めからほとんど形を変えずに続いてきた定置網漁は、江戸時代末ごろに初めて麻網という新しい材料が出てきて改良される。明治 40 年代以降は、網元たちが集約して大規模化が図られる。昭和 40 年代以降になると、網の形はそのまま素材ががらっと変わって化学繊維が導入された。変化の画期は、第 1 に近代化の中で大規模産業化が図られたこと、第 2 に人力から動力化・機械化へ向かったこと、第 3 に化学繊維など化学製品の普及である。こうしたことが起こらない限り、漁法はそれほど変わるものではないのではないか。

天明 5 年（1785 年）『越中魚津漁業図絵』の曳網漁を見てみたい。

魚津では、曳網漁のうち地曳網漁で夏場にタイ、フクラギ、サバなどを捕っていた。余談だが、「フクラギ」という名前は江戸時代にすでにあったことも分かる。また船曳網漁では、船で曳網を引いてカレイ、ホウボウ、キスなどを捕っていた。『図絵』にはその様子が描かれている。魚津の夏場の地曳網ではタイが揚がる。真っ赤なタイがきらきらと輝く様子は、夏場の風物詩として江戸時代から見学者が絶えなかったようだ。

『図絵』で描かれた地曳網は、糸網、藁網、キリの浮子、錘りで構成されている。「氷見及び周辺地域の漁撈用具」には、昭和入善町の底曳網と魚津市の手繰網が含まれている。これらの資料を見ると『絵図』では藁網だった部分にマニラ麻の丈夫なロープが使われていて、キリ製の浮子と陶器製の錘りが付いている。昭和 30 年代ごろに使われたものだが、江戸時代のものと形はほとんど同じである。漁撈関係の用具は、地域の環境—海や波の深さ、回遊する魚など—に合わせて、その土地で代々受け継がれてきたもので、きっかけがないとほとんどその形は変わらない。それが大規模化や新素材の普及などにより、変化してきたのである。

一方、船は海を行き来して技術が伝播していく性質を持っている。そのため、船の構造はどんどん変化している。船の構造や航法が漁法へも影響を与え、江戸時代には経済性、帆走性能の向上が図られた。近代以降は洋型船の影響を受け、さらにエンジンなどを積んで機械化・動力化が図られていく。現代になると、FRP（繊維強化プラスチック）など、新素材の船が普及した。

5. とやまの和船

和船とは、広い意味では日本在来の工法で建造された木造船をさす。狭い意味では棚板構造（板を曲げて造る）と大板構造（縫い釘で板をつなぎ合わせて大きな板を作り、それを組み合わせて造る）を持つ木造船をいい、小さい船も大きい船も同じ造り方で造る事ができる。また、狭義の和船としては、一本水押（みよし）という、船首の部分に角材が付いた形が特徴である。

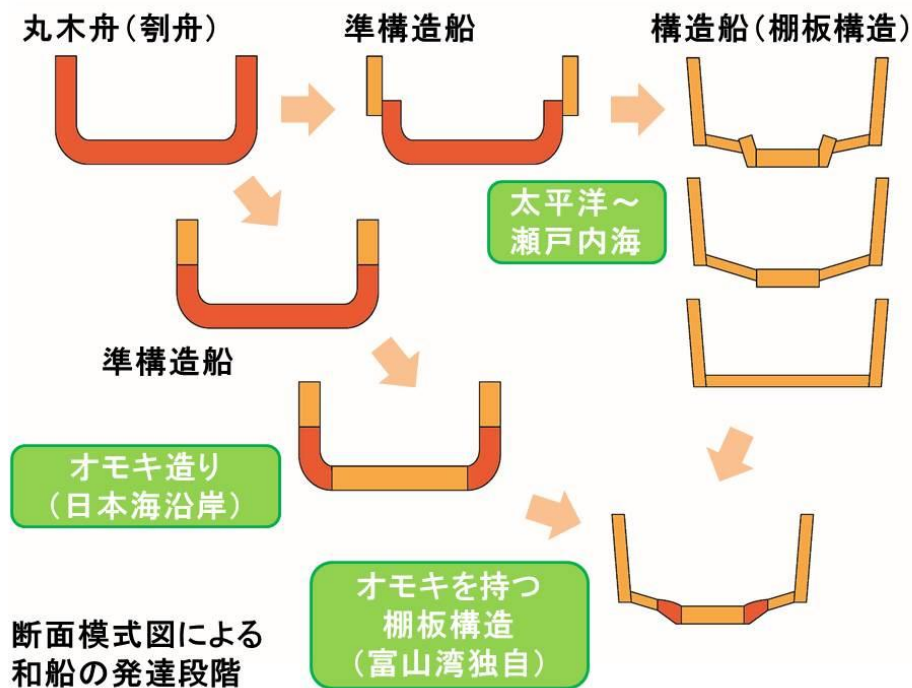
西洋の船は、背骨にあたる竜骨と肋骨があり、そこに細い板をつなぎ合わせて造る竜骨

構造である。中国の船は、船の間に板が壁のように挟まっいて、それによって水密性を高める隔壁構造になっている。日本の船はそれらとは違った形をしている。

和船の進化・発達過程を見ると、今から 7500 年前の縄文時代早期には、1 本の丸太をくりぬいた単材丸木舟が造られていた。千葉県で遺跡から現在のところ最古の丸木舟が発掘されている。その時代には、当然、丸太を束ねて造るイカダ舟もあったであろうが、現時点では証拠は残っていない。弥生時代になると、丸太を前後につなげた複材丸木舟が生み出された。これにより、徐々に舟が大型化する。古墳時代になると丸木舟の横に板を付けてさらに舟の幅を広げた準構造船になり、室町時代になってようやく板だけで造る構造船が生み出される。

船の進化は大工道具の進化と切り離せない。例えば、縄文時代から弥生時代の変化には鉄器（鉄製品）が使われるようになったことが背景にある可能性がある。また、室町時代に構造船が生み出される原因の一つになったのは、14 世紀に中国から板を作るための縦挽きのノコギリや、台付きのカンナが伝わったことだろう。

また、船の形は地域によっていろいろな発達の仕方をしたと考えている。太平洋側では太くて短いクスノキを使うので、前後につなげていく複材丸木舟が造られた。日本海側ではまっすぐで長いスギをそのまま使うか、左右につなげていった。オモキ造りは、くりぬいた部材を左右に分けてその間に板を付け、上にも板を付ける。日本海沿岸特有のスギ製の丸木舟から発達したものだろう。日本海沿岸では、木造船の終焉期まで、くりぬいた部材を使った船が造り続けられていた。最終的には、瀬戸内海で生まれた技法と、日本海側で生まれた技法が合わさったような富山湾独自の形式の船も造られるようになる。江戸時代の前半から中頃にかけて海運網が発達し、弁才船—いわゆる千石船、北前船の船形の船—が全国を巡るようになってとともに、全国に瀬戸内海風の船が伝わり、狭い意味での和船が各地に根付いていったのである。



これらの船形は時系列に沿って発展してきたが、新しい形式の船が出来たからといって以前の船がなくなったわけではない。例えば、男鹿半島ではまだ丸木舟を使っているところがある。準構造船に分類されるオモキ造りは、富山湾ではドブネと呼ばれ、昭和 30 年代まで氷見で定置網漁に、昭和初め頃までは魚津で地曳網漁に使われていた。

一方、棚板構造の船は、海運網に乗って 17 世紀後半に富山湾に入ってきて、漁業では 18 世紀後半には既に使われていたようだ。一枚棚構造の船は富山湾ではカンコと呼ばれ、平底の汎用船だった。三枚底（二枚棚構造）の船としては、テンマ、サンパ、キンパチ、テントなどがある。テンマは定置網漁の作業用に使われた。サンパは、大型の綱取り船だが、操船性が悪く壊れやすかったので、昭和 30 年代の一時期に使われたもの。キンパチは細身で快速の小型船で、富山県東部で使われていた。テントは、刳材オモキを組み込んだオモキ造りの二枚棚構造の大型船で、富山湾一帯の漁業を担った。ただし、新湊だけはオモキが無い通常の二枚棚構造の船であった。

6. 船を造る技術

船大工の技術として重要なものに、まず接ぐ技術がある。船釘や木製カスガイのチキリを使い、接着剤としては漆を使った。より水密性を高めるため、板と板の間を専用のノコギリで摺るアイバスリという技法もある。もうひとつ重要な技術として、板を曲げる技術がある。曲げる技術としては、ツカセという角棒を入れて船の形を造り、火を使ってその形が元に戻らないようにするヤキダメやヤキマゲの技術がある。おそらく江戸時代にはこれらの技術を駆使して船を造る専門の船大工がいたのだろう。船大工は、木造船が終焉を迎える昭和 40 年代末まで大活躍していた。

しかし、昭和 40 年代後半以降、FRP（繊維強化プラスチック）船の普及によって木造船が急速に減り、今は昔ながらの造船技術も消えつつある。木造船の需要が減ったことで、廃業か FRP 船への転業を迫られたのである。現在では、木造船の造船経験のある船大工は高齢化し、後継者がいない中で、7500 年にわたってこの国で培われてきた木で船を造る技術は消えようとしている。しかし、氷見にはまだ船大工が何人かいて、今でも和船の建造を手掛けている。中でも近年活躍しているのが番匠光昭さんである。番匠さんは、近年では映画『海賊と呼ばれた男』で主人公が乗っている和船の修理も手がけた。

今回紹介した和船のうち、ごく一部が現存しており、いずれも「氷見及び周辺地域の漁撈用具」として登録された資料に含まれている。それらは氷見市立博物館や氷見市文化財センターで収蔵・展示しているので、機会があればぜひ見に来て欲しい。



番匠造船で建造中のテンマ。船体を曲げ付けているのが角材のツカセ。



アイバスリ。材の隙間をノコギリで摺り合わせることで、隙間をなくし、水密性を高める。黒く焦げているのは、曲がった状態で木にクセをつけるヤキダメの痕跡。